

従来正面から取り上げられることの少なかった日本における噴水の歴史を取り上げる。噴水は水を止めてしまえば、その姿が消えてしまう。ひとたび水を断たれ年月が経ってしまえば、そこに噴水があったのかも定かではなくなってしまう。噴水の不遇はこうした性格が災いしたのかも知れない。また、噴水を西洋文化の象徴、滝を日本文化の象徴として対置し、自然の流れに反する噴水は日本人の好みではない云々とする日本文化論も、日本の噴水から目を遠ざけてきたのかも知れない。しかし、戦前の絵葉書や新聞記事等に残された噴水の痕跡をたどると、その実、明治時代以降、日本各地で多くの噴水が作られてきたことがわかる。日本における噴水の起源は諸説あるが、日本で噴水が普及したのは明治時代以降。水道技術やポンプ等の産業機械の発達を背景とし、博覧会などを通じて広がったことは間違いない。そのあまりの流行ぶりに眉をひそめ嫌悪感をあらわにする人々もいた程である。まさに百花繚乱、噴水は博覧会、公園、遊園地、水族館、動物園、駅前、百貨店の屋上、寺社仏閣の庭とあらゆる場所でその花を開かせた。噴水を追いかけると、近代日本のさまざまな光景に立ち会うことになる。

華やかな噴水は人々の目を楽しませ涼を提供する一方で、広告媒体や防火設備として使われる実用品としての面も持ち合わせてきた。こうした噴水の多様な性格を「アートとしての噴水」「モニュメントとしての噴水」「インフラとしての噴水」「メディアとしての噴水」「エンタテインメントとしての噴水」という五つの視点から眺めてみたい。

「アートとしての噴水」: 噴水は個人の名前で語られる芸術作品としての側面がある。例えば明治時代、彫像を用いた噴水の建造に多士済々、洋風彫刻を学んだ彫刻家たちだけではなく、伝統的な鍍金や陶芸、左官の技術で名を成した職人たちなど、当代のさまざまな造形家たちが参加し、噴水の意匠を模索している。一例として内国勧業博覧会の会場を彩った数々の噴水や日比谷公園の鶴の噴水等を取り上げる。

「モニュメントとしての噴水」: 皇居外苑・和田倉噴水公園の皇太子御成婚記念噴水のように慶事の記念を契機として建造された噴水は多い。非日常的な空間を簡単に作り出せる噴水はさまざまな祝賀イベントを演出する装置として使われた。セレモニーが終われば取り払われる仮設の噴水として作られることもあれば、半永久的なモニュメントとして作られることもあった。一例として、水道開通を記念した噴水や皇室の慶事を記念した噴水(ハワイ・ホノルルの鳳凰噴水塔等)を取り上げる。

「インフラとしての噴水」: 大量の水を必要とする噴水は時として防火設備となることも期待されていた。噴水池は非常時の貯水池となる。一例として、巨大な木造建造物を守るための防火設備の一環として計画された京都・東本願寺の大噴水を取り上げる。

「メディアとしての噴水」: 博覧会などで噴水は人々の耳目を集める格好の広告媒体としても活用された。その効果を高めるため、イルミネーションなどの新技術も積極的に使われている。一例として、ライバル企業との広告合戦で巨大な噴水塔を出現させた「つちやたび」の事例や保険会社、ポンプ製造会社の事例を取り上げる。

「エンタテインメントとしての噴水」: 噴水が娯楽的な性格を強めたのは戦後、コンピュータ技術の発達に負うところが大きい。昭和30年代、噴水は競うように大型化し、コンピュータ制御により音楽に合わせて自由自在に水の形を変える「踊る噴水」と呼ばれる噴水も登場する。また、照明技術の力を得た噴水は昼の世界から夜の世界へ進出する。一例として当時「マンモスキャバレー」と呼ばれた大型キャバレーとその噴水ショーを取り上げる。